

〔小林秀雄に於ける「批評方法」の要諦(著『批評』『読者のために』から)〕

*「文藝・美術・音楽の藝術性(『読者のために』P296)」「在るがままの作品の姿(物:場C')」に對しても、「人間の(過去や外國の)現に生きてゐる個性的な印(P292『批評』)」「即ち、西行・徂徠・ゴッホ等(物:場C')」に對しても、小林は自分の「仕事(D1)の動機のうち、愛(D1の至大化)とか信(D1の至大化)〔即ち「直接的取引き(D1の至大化)」に關する一種の發言(D1の至大化)〕(『批評』P292)〕とか呼ぶべきもの(『読者のために』P296)を必要としてゐると言ふ事。

(物:場C')

①「人間(過去や外國)の現に生きてゐる個性的な印(西行等の物:場C')」(P292『批評』)②「自分(物:場C')」(P292『批評』)。

* 批評D1)は、左項①「との直接的取引き(D1の至大化)に關する一種の發言(D1の至大化)を基盤」(『批評』P292)。
* 「批評家(△粹)各自が」、左項②「自分(物:場C')のうち、批評(D1)の具體的な動機〔批評對象への愛・信(D1の至大化)〕を捜し求め(D1の至大化)、これを明瞭化(D1の至大化)」(『批評』P292)。

④「文藝・美術・音楽の藝術性〔在るがままの作品の姿(物:場C')〕(『読者のために』P296)

* 左項④への「(自分の)仕事(D1)の動機(D1)のうち、愛(D1の至大化)とか信(D1の至大化)とか呼ぶべきもの」(『読者のために』P296)が必要。

「現在の經驗的事實(物:場C')の性質(物:場C')」(P281『無私の精神』)。

〔關係論的記述(PP圖参照)〕・・・①「文藝・美術・音楽の藝術性〔『在るがままの作品の姿』(物:場C')〕及び『人間(西行・徂徠等)の現に生きてゐる個性的な印』(物:場C')〕⇒からの關係:〔②『直接的取引きの發言(D1の至大化)』即ち①に『批評(D1)の具體的な動機〔②對象への愛・信(D1の至大化)〕を捜し求め(D1の至大化)これを明瞭化(D1の至大化)〕〕⇒②の對立的概念:『③自他の主張(F)』⇒③を『極度に抑制・斷念』(Eの至大化)⇒小林(批評) :①への適應正常(D1の至大化)。

「評家の生活環境(藝術性が現前:物:場C')の性質」(P281『無私の精神』)。

「日に新たな物(物:場C')」(P281『無私の精神』)。

「生活經驗(物:場C')」(P289『批評』)。